



佐那河内村の学術調査によせて

徳島県立図書館長 小 田 隆 昭

平成13年度の県立図書館と阿波学会による総合学術調査は、佐那河内村で7月下旬から8月上旬にかけて猛暑の中で実施しました。参加された調査員の方々、また調査期間以外にも継続調査された方、そして編纂作業に携われた各編集委員、佐那河内村当局の皆さんなど関係者のご尽力により、このたび報告書が発刊される運びとなりました。

総合学術調査は昭和29年以来、毎年のように続けられてきました。特定の地域を対象に、あらゆる分野にまたがる研究テーマを調査することは、全国的にみてもたいへんユニークな活動であると言われております。

さて佐那河内村は県中央部に位置し、気候温暖で風光明媚な農山村です。徳島市に隣接し、車でなら市内中心部から約30分程度、また村内どこからでも役場までは10分前後で到着できます。こうした生活環境と最近流行の自然志向の影響もあり、いわゆる“田舎暮らしの生活”に憧れて、当村に移住する家族も増えつつあると聞き及びます。

今回の佐那河内村の詳細な調査結果については、本編を御覧いただくとして、特徴的な成果を2～3ご紹介いたします。

佐那河内村では昭和30年前後からみかん栽培が盛んになりました。ところが昭和56年の寒凍害をきっかけとして、すだち栽培に転換した農家が多く、現在では神山町と並ぶすだちの生産地として知られています。地理班は、この点に注目し、果樹経営の推移と現状分析を試みています。1戸当たりの平均栽培面積は先進地の神山町よりも広く、転換農地の利点を生かした経営に特徴がみられます。

また当村は、地質的に三波川帯、御荷銚帯および秩父帯を構成する地層や岩石が带状に分布しています。地質班では、御荷銚帯および秩父北帯の緑色岩の化学組成を分析しましたが、その結果、両者には明らかな化学組成の違いがあることを確認するとともに、それぞれ異なる起源を示していることなどが判明しました。

佐那河内村の大部分は照葉樹林地帯に属していますが、全村にわたってコナラ群落やアカマツ群落が広い面積を占めて、スギ・ヒノキなど植林も進んでいます。植生班の調査によると、旭ヶ丸山頂周辺に生育しているアワノミツバツツジ群落は、他に類を見ない貴重なものであり、自然保護の観点から保全の必要を提起しております。

この他にも優れた調査がたくさん行われましたが、紙面の都合で、ほんの一部だけの紹介となりました。この機会に報告書に目を通して、ぜひ御活用いただきたいと存じます。

最後になりましたが、今回の調査にあたりまして佐那河内村当局をはじめ、地域・団体の皆さまから多大の御支援、御協力をいただきました。また、調査に参加された調査員の皆さま、暑い中を本当にご苦労様でした。ここに衷心より厚く御礼申し上げます。